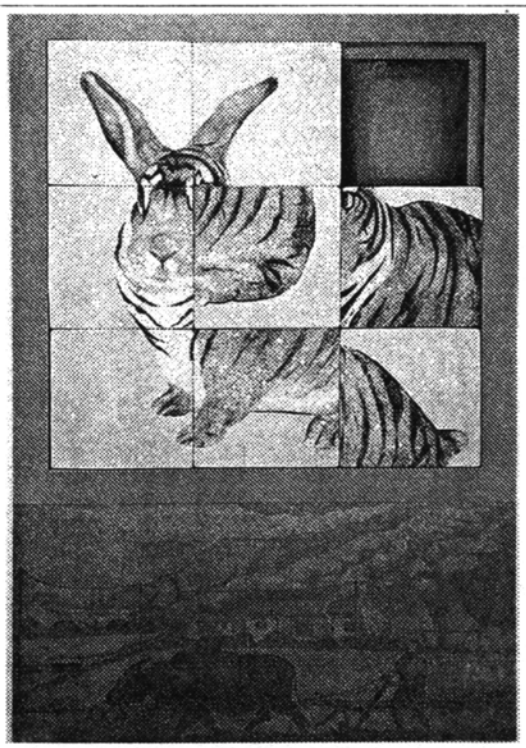
奇妙な絵に台湾の苦悩

楊茂林展



「大員紀事・虎L9501」

美術

個展形式で台湾の現代美術を紹介する台湾現代芸術序幕系列の第六弾。一九五三年生まれの楊はこれまでに登場した五人よりいくらか古い世代に属する作家だが、台湾の現代美術の独自の魅力を形作っている、ある共通の傾向をこの作家の仕事の中にも見て取れる。

その傾向とは、制作の動機がアイデンティティーをめぐる切実な問いに発しており、「私」とは何かという問いは、常に台湾とは何かという問いにオーバーラップしているという事情である。

「自分探し」はわが国の美術界でもひところはやったが、そこでの「私」の探究は日本という国家や社会のアイデンティティーをめぐる問いと不可分に結びついていたわけではない。日本とは何かという問いがリアルな問題として浮上することは意外に少なかったように思われるのだ。

私たちの「自分探し」は日本という比較的安定した国家・社会を前提としたうえでの甘えた議論でしかなかったのではないか。台湾の作家たちの表現に接して、そんな感慨をも誘われる。

「祖父は中国人、父は日本人、私は台湾人。三世代がそれぞれ違う国家に統治された。こんな経験は世界でもまれなことでしょう」

楊のこんな発言を聞けば、台湾の人々のアイデンティティーをめぐる屈折の大きさがあらためて思いやられる。しかも、現在の台湾がまた国際社会の中で漂流を余儀なくされている。福岡アジア美術館で開催中の第一回福岡トリエンナーレが「二十一か国・地域の参加で開かれている」と言われる時の「地域」という表記。国家でありながら国家ではないとされているのが台湾なのだ。

楊はそのようなアイデンティティーの揺らぎを歴史、政治、文化のそれぞれの位相において辛らつにあるいはユーモラスに批評してきた作家だ。台湾の命運という問題が作家の脳裏を去ることがないらしいことは、本展の平面四点とインスタレーション一点によっても十分にうかがうことができる。

例えば、「大員紀事・虎L9501」（九五年）は九つに分割された画面にトラともウサギともつかない動物が描かれ、その下には切手から引用したという台湾の伝統的な農村風景が添えられている。奇妙な動物の絵は独立か大陸との統一かという問題をはじめとする様々な対立を、陰画のようにくすんだモノクロームの風景はそのような議論の中で肝心のアイデンティティーの根拠があいまいになっていく事情を表しているらしい。

これらの作品を理解するには台湾の歴史や政治の文脈にある程度通じていることが必要だが、表現としての普遍性に欠けるという批判は当たるまい。読み解く努力を怠らなければ、周到な仕掛けを施されたこれらの作品が主題に則した完成に達していることに気づくことはさほど困難なことではないからである。

普遍的な個人など地球上のどこにも存在せず、どんな個人もそれぞれに固有の文脈を生きているという点にこそ人間の真の普遍性はあるということをむしろ思うべきだろう。（人）

5月8日まで、福岡市中央区大名1の1の3、モマ・コンテンポラリーで。

文芸誌リーダー ◆198◇

俳句は「すごい形態の文学」

高雅・鮮烈さを指導理念に

小島隆保（こじまたかやす）

福岡市・春吉に住んでいた作家原田種夫（故人）とは家が近く、自ら営む医院の患者の一人だった。俳論集「一点の芳草」（1985年・梓書院）の序文は原田が書いた。

〈耳を洗われる言挙げに満ちた真摯な俳話集〉は三刷発行。「精魂込めて書いた。今でも俳句講座で使っている」

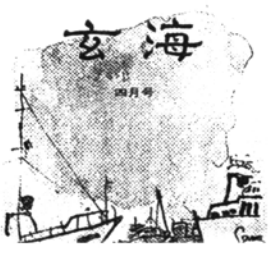
1920年（大正9）福岡市の生まれ。県立福岡高校定時制から長崎医科大学（現・長崎大学医学部）に進み、卒業後、九州大学医学部で研修。俳句は「九大で『ホトトギス』を見て始めた」。小説家志望を撤回させたその魅力は「多忙な医者でもできる文芸。多くを語らずしてすべてを語る。こんなすごい形態の文学は日本にしかない」。

「虚子学」を提唱するほど高浜虚子に傾倒している。俳誌「玉藻」「冬野」「菜殻火」などを経て、「玄海」を出したのは三十六年間開業した医院を廃業した後の93年（平成5）だった。虚子の唱えた〈花鳥諷詠〉に〈高雅にして鮮烈な〉を冠して指導理念とする。月刊。会員四百人。

好きな秀句から選ぶ巻頭の「○月の句」、一年前の自作を紹介する「去年の今月」、俳論「自戒録」など精力的な仕事ぶり。中でも「去年の今月」はユニークだ。「今作ったものでも掲載は二か月先になる。季節はずれはピンと来ないし、作品は一年ぐらいおいておくと評価が定まるものです」。昨年12月号は「妻病みぬ」、今年1月号は「妻癒し」だった。

妻病みて時雨の日々のつづきをり

柊や妻病みてより詩貧し

癒えたるぞ紅梅匂ふやうに妻

哀は去年歓は今年に